

## JICE

JAPAN INTERNATIONAL COOPERATION CENTER

No.57  
April  
2007

## CONTENTS

1 Interview この人にきく

2・3 私の提言「途上国と救急救助」

4・5 テーマエッセイ / 「人のつながり」

6 JICE NEWS

Sano  
Interview  
この人にきく Akira

佐野 明さん

島根県立出雲農林高等学校 校長

## 「おもしろそうだ、やってみよう」

本当は農業をやりたいんです。学校の行き帰りに水田を見ながら「あちのほうがおもしろそうだなあ」ってね。でも実家は農家ではないので田畑もないし、教えることも好きだったので、結局、教育者として農業後継者を育てる側にまわりました。生徒には、「農業はおもしろそうだ、やってみよう」と意欲を持たせ、自主的に課題に取り組む「プロジェクト学習」方式で自分の可能性を広げるよう育てています。

出雲農林高校に着任して感じたのは、生徒たちはもっと外の世界に触れて世界観や視野を広げてほしいということでした。そこで平成17年度と18年度の2回にわたり、海外研修を実施しました。訪問先は私が以前関わりのあったウズベキスタンを選び、生徒には現地の農業カレッジでプロジェクト学習の課題の発表をしてもらい、日本の農業教育の実例を紹介しました。生徒たちは訪問する先々であたたかい歓迎を受け、一所懸命コミュニケーションをとろうする現地の人たちに感激し、初めて訪れる外国で見て聞いて体験したことすべてが「おもしろうてたまらんかった」そうです。

## アジアの若者と地域活性化

また、今年2月には中国の高校生5人の体験留学を受け入れました。トラクターの運転やフラワーアレンジメントなどバラエティに富んだ内容でしたが、いずれも通常の授業だった点が農業高校の強味だと思います。生徒たちは英語を流暢に話す中国の高校生に驚いたようでしたが、彼らにとっては大学に進学すること、外国語を覚えることが将来の幸せに直結していますから、モチベーションが違うのでしょう。しかも勉強ができるだけでなく、ものの考え方も柔軟で魅力的でした。

この体験留学は双方の生徒に好評で、よい経験に

なっただと思います。地域活性化という視点で考えると、今回のようなアジアの若者の招へいの機会をグリーンツーリズムの一環ととらえ、JAなどと連携し地域ぐるみで関わっていくのも一考かもしれません。招へいした若者たちを地域の農家にホームステイさせて草刈りやぶどうの収穫の手伝いもしてもらおうのです。それが若者にとっては異文化交流と体験学習になるし、農家にとっても農業への自信と農村が持つ価値の再発見につながり、地域活性化の可能性が広がると思います。あとは受け入れる側の「慣れ」ですね。

今年8月23日・24日に開催される全国国際教育研究協議会全国大会の担当校になりました。そこでの研究協議が、日本の伝統や文化に立って自立し、共生ができる若者の育成につながり、彼らが具体的に行動して、国際協力ができればいいと思います。まずは相手を理解し、自分の意見を持って話し合うことで相手に理解してもらおう。それが人と人とのつきあいだと思っています。

農業の勉強は、大変だけどおもしろい。  
広い視野と目的意識をもった人になってほしい。

さの・あきら 昭和23年島根県松江生まれ。東京教育大学卒業。埼玉県および広島県で教員、広島県教育委員会管理主事および指導主事、文部科学省初等中等教育局教科調査官を歴任。同省在職時、数次にわたり国際協力銀行「ウズベキスタン職業教育拡充事業」に参画(平成10年～15年)平成15年度より現職。著書に『「農業」から教育を拓く』『農業教育の再構築を目指して』(共著)など。出雲農林高校は、今年1月～2月に実施された「中国高校生中期招へい事業」(独立行政法人国際交流基金日中交流センターとJICEが共催)の受入校。

# 私の提言 途上国と救急救助

## 組織として、プロとして人命救助に懸ける

24時間昼夜を問わず発生する災害から人命を救う消防隊員たち。プロとしての技術と高いモチベーションが要求される世界だ。「人の命を救いたい」という世界共通の思いを次代へつなく大阪市消防局の取り組みについて、同局警防部警防担当救助の消防司令・橋口博之さん、消防司令補・井本登巳彦さん、田中智也さんに聞いた。

### 大阪市消防局

#### 「組織力」を伝える

日本の消防技術の特徴は、「組織力」にある。組織が確立され、各部隊が救急・救助・消火と明確な任務分担のもと初動からの確実に稼働する。現場では安全管理上の問題があるため、単独行動は許されない。大阪市消防局の特徴は、救助隊員の制服の色を区別するなど明確な任務分担をしているとともに、救助だけでなく多岐にわたる業務も担当している点にある。たとえば、火災の原因調査や消防活動全般にわたる業務は他の隊員とともにしている。そこには役割分担を明確にし、連携した組織プレーを実行するため、現場はむしろ通常の仕事にも「チーム」という考え方が貫かれている。

#### 教えることで教えられる

救助隊は、誰でもなれるというわけではない。厳しい訓練を経た者だけが選ばれる。大阪市消防局の救助隊は56隊あり、これだけの規模は他の都市ではあまり例がない。隊員の人材育成は急務の課題だ。JICA研修の受入も人材育成の一環と位置付けられ、警防部の救助担当が主体となって救急救助技術を指導している。2カ月という長期の技術指導経験は、JICA研修が初めてだ。指導を担当する隊は、研修内容

の企画から実行まですべてを担当する。研修員のレベルは国によってさまざまで、研修員の表情や態度などで反応を見ながらリアルタイムでプログラムを調整していく。研修指導を通して企画・立案能力、調整・対応能力、指揮能力が備わり、隊員一人ひとりのモチベーションが格段に向上するという。「人に教えるには自分も勉強する必要がありますし、その技術を持つには大変な能力がいる。とてもためになる経験です」(橋口さん)。「言葉は違っていても、やはりプロの消防士同士、思いは一緒だな、と思いますね。根性入れてやらなければならぬところは彼らもわかりますし、「頑張れも日本語で通じます。炎天下、炎と煙のなかでの救助訓練などはストレスと緊張でかなりつらかったはず。」「頑張るな」「頑張ります、わかりました」と声を掛け合い、研修員が一所懸命に学び取り組む姿を見ていると、こちらも一所懸命教えようと初心にかえり、本心に心が洗われます」(井本さん)。

研修は1隊4名が1チームで指導する。さらに国際緊急援助隊(JDR)救助チームの登録隊員も研修に参加するため、毎年約50人の救助隊員がJICA研修に携わる計算になる。

研修員からも「他の国からきた消防士たちと経験を共有できて素晴らしい」「しっかりと準備して訓

練に臨んでくれる隊長たちに感謝したい」とのコメントが寄せられている。JICA研修は今後も受け入れていく予定だ。「帰国した研修員から、向こうで頑張っているメールをもらいました。教えている以上は研修が帰国後にどう活かされているか気になります。私たちがフォローアップに行くと、現地でワークショップができたらしいなと思っています」(橋口さん)。

#### 海外での経験がもたらすもの

総務省消防庁では、海外での災害に対しJDR救助チームへ隊員を派遣している。田中さんは、平成16年12月に発生したスマトラ沖大地震・インド洋津波災害で、第三次隊の先遣隊としてタイ・プーケットで3週間活動した。現地では

#### プロとして結果を出す

は孤立した地域や島にヘリコプターで物資を搬送するなどの救助活動とともに、技術指導や被害調査を行った。「海外の活動でも基本は人命救助なので国内と同じ気持ちですが、JDRでは初対面の救助チーム隊員や現地の人と連携していくなど、普段できない経験をしました。この貴重な体験を自分の後輩に伝えていきたいです」(田中さん)。

救助隊員の育成にあたり到達点をいかに上げるか。そのための訓練を考え、プロとしての技術レベルを上げていくのが橋口さんと井本さんの役割だ。「どういう技術をもって、助かる命を助けるか。それが与えられた職責です。その確かな判断や決断ができなかったら自分も怪我します。これは訓練を通して自分で身につけていくべきものです」(橋口さん)。「以前、東京・大久保で韓国の方が線路に落ちた人を助けようとして亡くなったことがあります。誰もがその方と同じように、人の命を救いたいという気持ちを持っていると思っんです。僕は知識と経験と訓練を積んでいますから、命がけではなく確実にやる自信と技術がある。そのモチベーションを持ち業務を遂行することが僕ら消防の役目であり使命ではないでしょ

うか。ただ、がむしゃらなことはしたくない。確固たる自信と技術を持つて結果を出す、それがプロだと思います」(井本さん)。「就職先を決めるとき、男だから命がけでなにかやりたいと思って、入る前のイメージよりも「こいつって、配属されてからもっと仕事が好きになりました。JDRに派遣されて感じたのは、たとえ助かる可能性が限りなく0%に近いのがわかっていても、その人や家族の身になってあげること。待っている人が必ずいるのだから」。がむしゃらになりそうな自分がある反面、いちばん大切なのはそこでプロ意識を持つ必要があるということ。そこはまだ、自分自身で歯止めしないといけないです」(田中さん)。

都市化が進んだ日本では、地下街の大規模火災、超高層ビルの火災など、想定以上の事態が発生する可能性があるという。「だからこそ日頃から訓練や技術、知識を磨いて、対応できる引き出しをいっぱい持つていないと。到達点はきりがないですね」(井本さん)。「私自身、高校のとき車が横転した事故で手伝う機会があり、人命を助ける仕事をしたいとの道に入りました。熱くて個人的な人間が集まっている、それが大阪市消防局です。いい意味で規格外で負けない人間が多くて、それがいい方向に思っています」(橋口さん)。

**大阪市消防局**  
大阪市内24区を管轄区域に、24時間体制で大阪市民を災害から守っている。警防部は災害対応部門で、ポンプ隊、救助隊、梯子隊などで構成される。平成10年度からJICA「救急救助技術コース」を受け入れており、JICEは研修監理員を配置している。  
写真提供:大阪市消防局



物資支援任務のため、物資をヘリコプターに積み込む隊員(平成16年12月 スマトラ沖大地震)



円陣を組む研修員と指導隊員(平成18年度JICA「救急救助技術コース」)



「人のつながり」って何だろう？」

# 「兎角この世は住みにくい」?

## 日本人が知らない、エジプト人の本音

エルナツハース・ヌール

### 未知なるエジプト

昭和48(1973)年第四次中東戦争中、エジプトをはじめアラブの国々が団結し日本を含む諸外国への石油の輸出を一時見合わせたオイルショックは、世界の経済や産業に多大な影響を与えた。また日本政府がエジプトや中東地域に関する意識や関わりが薄かったことに気づき、駐エジプト日本大使館に広報文化センター開設等の日本紹介政策をとるきっかけともなった。

私はその一環で設立されたカイロ大学文学部日本語日本文学科で、日本人の心を知ろうと修士課程のテーマとして夏目漱石文学思想を研究した。大学時代から現在まで日本と関わってきた経験を通じてあらためて考えるようになってきたのは、日本人とアラブ人、とりわけエジプト人とのつきあいは果たしてうまくいっているのかということだ。エジプト人である私でさえ、エジプト人とのつきあいは非常に難しいと感じている。漱石は明治32年から2年間にわたっていろいろな不安を抱きながらもイギリスに留学し、先進国イギリスと日本との相違、またイギリスの文明とその矛盾に直面し、外国人としてどう生きるかにについて深刻な思考をめぐらせた。これが彼の全作品を貫く生涯のモチーフになっている。現代の日本人も、未知なるエジプトに行くとき同じような不安を抱くのではないだろうか。そこで、まだまだ日本人に知られていないエジプト人の性格や本音を紹介したい。

### エジプト人の「IBM」

これは、インシャーアッラー、ボクラマヤレシ」という3つのアラビア語の頭文字で、エジプト人の心や性格を反映している。エジプトは90%がイスラム教徒である。日常生活や仕事、大学、他人とつきあっているときに神様が心の底に存在する。旅行者や普通の人の場合、エジプト人と初めて会ったときに必ず「アッサラム・ムレイコム、皆に平安あれ」と挨拶され、あたかも間にあった壁が崩壊したように、すぐに仲良くなれた感じがすると思う。以前から知っているかのように、家に呼んだりお茶や食事にも誘うこともフレンドリーな人が多い。イスラム教の聖典コーランには、「アッラーの神の思召しなしては明日召することを言つな」と書いてある。そこから「インシャーアッラー(何もかもするときは神様の思召し)」という言葉が生まれた。明日会おうと言う前に「インシャーアッラー」が先に来る。それは、行けないかもしれないという意味も含まれている。でも「行かない」という意味は決してないはずである。が、残念ながら、行かないつもりで「インシャーアッラー」を言う人もいるところから、「IBM」のIが生まれた。一方Bは、日本語で言えば、今

度ね」という意味である。その今度来ないときもある。エジプト人は明日が来ない。後回しに物事をする人が多いことから生まれたBである。それにしかられるときにMにあたる「マレシ(すみません)」という言葉が生まれた。しかし、この3つの言葉を悪用する人が多いと思わないでほしい。残念ながら、ガイドブックにはエジプト人はみなそう見えると書いてあるようだ。

### ストレートで密接な人つきあい

また、エジプト人と初めてつきあうとぶつかるのはエジプト人の好奇心である。エジプト人は相手のことをシッソク(すぐ)に知りたがるのである。あなたはどこから来たんですか、宗教は何ですか、結婚しているか、彼氏がいるかなどつい聞いてしまう。それは誤解しないでいただきたい。好奇心に過ぎないと思う。また、エジプト人は人との間のスペースをあまりあ

けない。いわゆるべたべたする人が多い。会ったときに男性同士や女性同士でキスするのが当たり前。日本人と会うときはさすがに嫌がるだろうと思う。キスはしないが、仲良くならぬ日本人が帰国するときにも男でも頬づえにキスをするところがある。それはエジプト人の素直な好意を表している。

### 必要なのは「思いやり」

エジプトと日本は、文化の相違点が多いとはいえ共通性が非常に多いといえる。JICEの研修監理員の仕事を始めてからエジプト人だけではなくアラブ系の方々にもたくさんお会いして、国際協力に欠かせない互いの文化の分かち合いの必要性も実感した。お互いを知るきっかけが戦争だったことはとても残念だが、大事なものはこれからである。私は日本に来たときに「思いやり」を学んだ。まさに今、必要なのは「思いやり」だと思ふ。

漱石の根本思想の一つは、「個人主義」である。それは、人がお互いの自由を認めあい、気持ち尊重しあうことを説いている。この考え方が個人を超えて、国籍、人種、宗教の違うあらゆる人々と分かちあうための一つの大事な行為だと思ふ。そこに、私が大切に思う「思いやり」の本質が存在している。私のような僅かな力でも、日本人に学んだ思いやりや漱石の文学や思想を生かして物事を大きく捉え、鋭い目でエジプトや日本をはじめ世界を洞察し、より平和で豊かな世界になるよう貢献したいと強く願っている。私たちの家族、社会や国家の安全を願う、幸せを作り出すため力をあわせよう。エジプト人をはじめ、アラブ世界と日本人のお互いの協力や理解を深めるように、力をあわせよう。



イラク放送技術研修コースの研修員たちとは今でも連絡をとりあい、友好をあたためています(前列左が筆者)



漱石研究の恩師と琵琶湖のほとり(左が筆者)



Nour-EI-Nahas

エジプト共和国ロゼッタ生まれ。日本語研修で2度の来日後、平成11年~12年京都大学へ留学。平成15年カイロ大学大学院より文学修士号習得。大学時代から通訳業務に携わる仕事で日本に住むことを決意。旅行社の東京代表をはじめ通訳業務コンサルティング会社を設立し現在に至る。平成15年アラビア語の研修監理員として登録。アラビア語圏の研修コース(シリア水資源管理、イラク放送技術、パレスチナ地方行政、民主化セミナーなど)を担当している。

テーマエッセイ「人のつながり」って何だろう?とは

さまざまな分野で活躍する方に、一つのテーマやキーワードから「人のつながり」を語っていただく企画です。

JICEが目指す人と人とのつながりをあらためて考えるきっかけにしています。

# JICE 知をつなぐ。世界をつなぐ。未来をつなぐ。

## JICE NEWS

### 30年間の感謝をこめて 設立30周年記念セミナーを開催

2月23日、新宿明治安田生命ホールにおいてJICE設立30周年記念セミナーを開催しました。冒頭、諏訪理事長より、今までお世話になった方々へ感謝の意を表する旨の挨拶とミッションステートメントおよび新キャッチフレーズを発表し(下囲み参照)、今後の組織目標を内外に明確にすることで、ご支援いただく方々に対して、その期待にそぐわぬ活動を今後とも行っていく決意を表明しました。

#### ミッションステートメント

私たちは、「人づくり協力のプロ集団」として、開発途上国の国づくりを担う人材の育成を、共に学びあい、理解を深めながら支援し、平和で豊かな地球社会の実現に貢献します。

#### キャッチフレーズと ロゴマーク基本デザイン



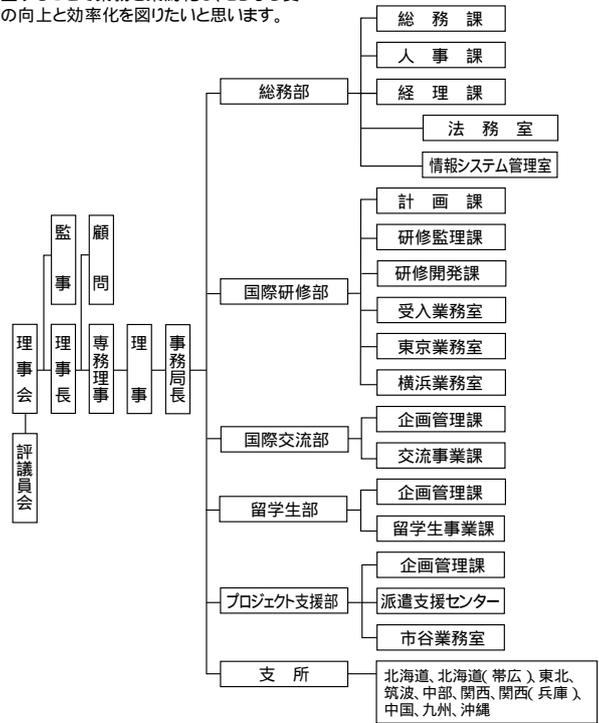
### 平成18年度第2回評議員会および理事会を開催

3月16日、JICE本部内会議室において平成18年度第2回評議員会および理事会を開催いたしました。今回は、平成18年度改定事業計画・補正収支予算、平成19年度事業計画・収支予算、評議員、理事、監事の選任および役員報酬算定方法の変更について審議が行われ、すべての議案が承認されました。

なお、昨年7月から本年4月までの役員および評議員の異動については下の「役員・評議員の異動」とおりです。

### 事業部の組織改編

本年4月1日付で本部の業務実施体制を見直し、下図のとおり、開発業務部、研修監理部、国際交流部および業務支援部の組織改編を行いました。これにより、国際交流、研修、留学生およびプロジェクト支援の4事業に対応する事業部を設置することで業務を集約化し、さらなる質の向上と効率化を図りたいと思います。



### 役員・評議員の異動

(平成18年7月1日～平成19年4月1日)

平成18年  
〔10月2日付〕 退任 評議員 小樋山 寛  
平成19年  
〔3月16日付〕 就任 監事 大西 誠

〔3月31日付〕 退任 理事 木寺 久  
退任 監事 大澤 尚正  
退任 評議員 小野田 勝次  
退任 評議員 加藤 宏  
退任 評議員 杉山 昭子

〔4月1日付〕 就任 理事 今井 康容  
就任 監事 土橋 憲一  
就任 評議員 喜多 悦子  
就任 評議員 末森 満

皆さまの声をお聞かせください

広報紙『JICE』に対するご意見、ご感想、ご質問、今後取り上げてほしいテーマや人物などを、下記アドレスへメールでお寄せください。  
広報紙『JICE』編集事務局 e-mail: kohoshi-jice@jice.org



私たちJICEは、個人情報保護法を遵守し、徹底した個人情報の管理をいたします。